

蠅螂—巢

此の虫は斯くも無残な戀をするが今度はもつとよい一面を紹介しよう。彼の巢は一つの不思議である。學術上は之れを「卵鞘」(oothèque)と呼んで居るけれども私はそんなをかした用語を濫用し度くない。「カワラヒワの巢」と云ふ代りに「カワラヒワの卵鞘」とは云はない以上、蠅螂の話をするに方つて鞘と云ふ言葉を借りねばならぬ理由が何處にあらう。其の方が一層學者風の云ひ廻しであると云ふ事は、或はさうかも知れない。しかしそんな事は私の關知する所ではない。

日當りの好い處だと、石と云はず、木と云はず、葡萄の根株、灌木の小枝、草の枯莖などの上は勿論、煉瓦の破片、襪襦布、こち／＼になつたぼろ靴等の人工品の上に至るまで殆ど到る處に尼蠅螂の巢が見出される。どんな臺でも構はない、巢が其の基部を捏り込んでしつかりした支據點を見出し得るやうな凹凸のあるものでありさへすればよいのである。

長さ四センチメートル、幅二センチメートルと云ふのが普通の大きさである。色は麥粒のやうな黄金色である。火にかざすと其の物質は可なりよく燃えて一寸焦がした絹のやうな匂を發散する。事實

これは絹に近い物質であつて、糸に引き伸ばされる代りに泡状の塊にかたまつたものである。巢が一本の小枝上に設けられる場合には其の基部は附近の小枝を包圍し、支柱の凹凸に従つて種々な形状を呈する。これが一つの平面上に設けられる場合には下面は、何時も臺の形通りになるので、これ亦平である。其の場合には巢は半楕圓形をなし、一端は多少鈍角をなし他端は細長くなつて居る許りか、屢々蹠爪狀の短い突起に終つて居る。

何れの場合にも表面は規則正しい中高である。其の表面にははつきりと區別される三つの縦の帯がある。中央の帯は他の帯よりも狭く、二つづゝ並べられて屋根瓦のやうに互に重なり合つて居る薄片から成り立つて居る。これ等の薄片の邊緣は遊離して居て、平行した二列の細い割目が開いて居る。其處から孵化の際に若い蠅螂が出て来るのである。最近に巢立つた後の巢では、此の中央帯に薄い拔殻が突つ立つて居て僅かの風にも揺れ動いて居り、間もなく野天の風雨に打たれて消え失せてしまふ。私は之れに脱出帯の名を與える、と云ふのは若い蠅螂は斯うして豫め設けられた出口を利用して必ず此の帯に沿うて脱け出るからである。

此の大家族の橋籃は其の他は何處をみても踰え難い城壁ばかりである。事實、二つの側方帯は半楕圓形の大部分を占めながら、其の表面が完全に連続して居る。斯うした硬い物質の部分に於ては、生まれては如何にも弱い蠅螂の子に取つて脱出の可能性は少しもない。其處にはたゞ多數の細い横條

が見えるが、これは卵塊を爲す所の幾つもの切片を示すものである。

巢を横に切つてみよう。さうすると卵の全體が一つの細長い核を作つて居る事が分る。此の核は非常に固く、側面を泡の凝固のやうな多孔質の厚い皮で蔽はれて居る。其の上方に彎曲した幾枚もの板が非常に密集して突立つて居り、殆ど遊離して居て、其の末端は脱出帯に終り其處で瓦のやうに並んだ小さな鱗片の二列を形作る。



ト核の上の蜂の巣の

卵は一見角質様の黄色味を帯びた一つの母岩の中に浸されて居り、圓弧に随つて、層をなして並んで居るが、頭端を一様に脱出帯に向けて居る。此の頭端の方向によつて脱出方法が想像される。生まれたばかりの蟻螂は中核の延長たる相隣れる二片の間隙の中に滑り込み、此處に狭い通路を見出す。尤も此の通路はなか／＼踰え難いものであるけれども、それでも後刻説明せねばならぬやうな奇妙な仕掛けがあるので兎に角踰えるには充分なのである。斯うして彼等は遂に中央帯に達する。其處では瓦のやうに並んだ鱗片の下に各卵層毎に二つの出口が開いて居る。脱出者の一半は右の門から、他の一半は左の門から、出るのである。斯うした状態は卵層の續く限り巢の一端から他端へと反覆されて居る。

此の構造の細目は實物を見ない者に取つては可なり分り難いけれどもまあ簡単に要約してみよう。

卵が層を爲して集まり、其の全體が巢の中軸に沿うて環の實に似た形を作つて居る。泡を固めたやうな一種の保護皮が此の卵塊を包んで居るが、中央帯に當る部分の上部だけは泡状の皮の代りに薄片が並置されて居る。これ等薄片の遊離縁は外部に於て脱出帯を形成するのであるが、互に瓦狀に相重なつて二列の鱗片をなし各卵層に對して狭い間隙の一對の出口を残して居る。

巢の製作に立會ひ、蟻螂がどうして斯うまで複雑な作品を作り上げるかを見る事が私の研究の眼目であつた。私はどうやらそれに成功したが、どうして中々に骨が折れた。と云ふのは産卵は不意にそして殆ど何時も夜の間に行はれるからである。幾度となく待ちばけを喰つた後に遂に私は好機に恵まれた。九月五日、私の寄宿生の一疋が、八月二十九日の受胎だつたが、私の目の前で午後の四時頃に産卵する氣になつたのである。

彼女の作業を參觀する前に一つ注意する事がある。それは私の虫小舎の中で可なり多数に出來た所の巢が、一つの例外もなく皆鐘形籠の金網を土臺として居る事である。私は特に注意して若干のざらざらした石ころや、タチヂヤカウサウの花束など自由な野良に於ては極めて多く使用される所の支物を、彼女等の爲めに入れて置いてやつたのである。しかも女囚等は金網の方を選んだのである。それは、金網の方が最初の中は軟かい建築材料が其の目に喰ひ込んでしつかりとくつつくからである。

巢は天然の状態では何等の掩蔽物をも有つて居ない。雨、風、霜、雪等あらゆる冬の氣象上の變化

に堪えて脱離しないものでなければならぬ。それ故産婦は巢の基礎がしつくりと嵌まり込んでよく、つついて居るやうな凸凹の支物を何時も探すのである。事情さへ許せば、好い加減なものよりも、より好いものを選び、より好いものよりも、最もよいものを選ぶ。之れが何時も虫小舎の金網が採用される原因であるに違いない。

私が産卵する處を観察する事の出来た唯一の蟻螂は、鏡形籠の天邊のあたりにとまつて居たので仰向けの位置で仕事をして居た。私が居る事も、私の虫眼鏡も、私の調査も一向彼女の邪魔にならない。それ程彼女は仕事に没頭して居るのである。金網の圓屋根を取り外し、傾け、逆にし、あちらへ引つくりかえし、こちらへ引つくりかえしても彼女は一瞬間たりとも其の仕事をやめない。ピンセットで彼女の長い翅を捲くり上げて其の下の様子をもう少しよく見ても平氣である。蟻螂はそんな事を少しも構はない。其處までは萬事都合がよい。産婦は動かずに居て、私の不遠慮な觀察に平然として應じてくれる。それでも矢張り事は私の望み通りには運ばない。それ程操作が速かで、點檢が面倒なのである。腹端は絶えず大浪のやうな泡の中に浸されて居るので其の動作を仔細に見分ける事が出来ない。此の泡は灰色が、つた白さで、少しく粘氣があり、殆ど石鹼の泡に似て居る。其の出初めに麥蘖の先を突込んでみると齧のやうにくつつくが二分も経つと固まつて最う麥蘖にくつつかない。僅かの間に古い巢と同じ程の堅さになる。

この泡状塊の大部分は小さい氣胞に包まれた空氣から成つて居る。此の空氣あるが爲めに、巢は蟻螂の腹の容積よりも遙かに大きい容積を有つやうになるのである。泡は既に生殖器の口から現はれて居るにしても、此の空氣が決して昆虫の體內から出て來るものでない事は明らかで、それは大氣の中から借り來るのである。そこで蟻螂は何よりも空氣を材料として巢を作るわけで、これこそ風雨霜雪に對して最もよく巢を保護し得るものである。彼女は毛虫類の絹液に似た一種の粘液を排泄し、此の粘液を直ちに外氣と混和して泡を作り出すのである。

蟻螂は我々が玉子の白味を掻き廻して膨らませ泡立たせるやうに其の産物を掻き廻はす。腹端が開いて長い割目をなして二枚の大匙を横に合はせたやうになつて居り、それを急速に間斷なく近づけたり遠ざけたりして其の粘液を掻き混ぜ、粘液が體外に排出されるに連れて之れを泡に變えて行くのである。のみならず此の二枚の匙の間に、内部諸器官が、ピストンの柄のやうに、上つたり下つたり、行つたり來たりするのが見えるけれども、何しろ不透明な泡の波の中に浸されて居るので、其の運動を正確に見極める事は出来ない。

腹端は絶えず鼓動しつゝ、其の瓣を急速に開閉しつゝ、恰度振子のやうに右から左へ、左から右へと振動して居る。これ等の振動の一つ毎に内部に於ては一つの卵層が出來、外部に於ては一つの横溝が出来る。腹端はかうして弧を描きつゝ進むに連れて急激に、非常に近い間隔を以て、泡の中へ一段

と深く潜入する。恰度何物かを此の泡塊の奥深く突込んで居るやうである。これは疑ひもなく其の度毎に一個の卵を産みつけて居るのである。しかし萬事が如何にも急速に行はれ且つ如何にも觀察に不便な状況の中に行はれて居るので、私は唯の一度も輸卵管の働きを見た事がない。私には急激な運動で泡の中に一段と深く潜入する腹端の運動によつて卵の出現を判断するより他に途がない。

これと同時に間歇的な浪となつて粘液が排出され、之れを腹端の二枚の瓣が掻き廻はして泡に變える。斯うして出来た泡は卵層の兩側及び其の基部に擴がる。基部では、見て居ると、腹端で押しつけられた泡が金網の目からはみ出して來るのである。斯うして卵巢が空になるに連れて次第に泡狀の被覆が出來て行くのである。

私は直接觀察が出来ないのでたゞ想像するだけであるが、卵を皮の部分よりも一層等質的なもので包んで居るあの中核を作る爲めには蠟蟻は、其の産物を匙で掻き廻はして泡立てずに其のまゝで使用して居るのであらう。そして一層の卵を産みつけてしまふと二枚の瓣が泡を作り出して之れを包むのであらう。しかし、重ねて云ふが、これ等の點は泡の塊に蔽ひ隠されて居るので見極める事が甚だ困難である。

出來たての巢では、脱出帯は細い氣孔を有つた物質の層で蔽はれて居るが、其の層は純白で光澤なく、殆ど白堊質で、巢の他の部分が汚い白色であるのと對照をなして居る。恰度菓子屋が或る種の菓

子を飾る爲めに、攪拌した卵白と、砂糖と澱粉とをもつて作る所の混合物に似て居る。此の雪のやうな塗料は非常に脆く、剝げ易い。此の粉が消えてなくなると脱出帯がはつきりと其の特徴をもつて現れ、遊離縁を有つた二列の薄板が見える。これ等の薄板は早晚、風雨に叩かれてぼろ／＼に又粉々に飛散してしまふ。それで古い巢には其の跡をすらも止めて居ない。

一寸見ると此の雪粉狀の物質は巢の他の部分の物質と異なるもののやうに思はれ易い。實際、蠟蟻は二つの異つた産物を用ゐるのであらうか。決してさうではない。先づ解剖學上から云つてこれ等の材料の一つである事は確である。巢の物質を分泌する器官は多くの縮まつた圓筒管から成り、これ等の管は各々約二十本から成る二群に分れて居り、全部無色の粘液に満たされて居るが、其の粘液はどの部分を取つて來ても一樣の外観を呈して居る。白堊色の物質の微候はどの部分にも少しもない。

それに又雪狀リボンの出來方も異種材料の考えを拒んで居る。事實、見て居ると、蠟蟻の尾の二つの網は泡の浪の表面を掃ひ、云はば泡の泡をすくひ取り、之れを集め、之れを巢の背面に維持して其處に菓子の上のリボンに似た帯を形成するのである。此の掃き寄せの後に残つて居る所のもの、或は未だ固まらない帯から流れ出す所のは兩側面に擴がつて一種の小泡のある塗料となるが、此の小泡は餘りにも細かいので虫眼鏡でなければ見る事が出來ない。

粘土を含んだ泥水は激漣を流れ走りつゝ大きな泡で蔽はれる。此の泥に汚れた基礎的な泡の上の所

所に眞白な小さな泡の塊が現はれる。密度の相違から一種の淘汰が行はれて雪白の泡が元の汚ない泡の所々に浮んで来るのである。之れに似たやうな事が蠅螂の巢作りの際に行はれるのである。二枚の匙が腺から分泌された粘液を泡に變える。其の中で一番細かい一番軽い部分が其の細い多孔性の爲めに一段と白くなつて表面に現はれる。それを尾端の網が掃き寄せて巢の背面に雪のリボンのやうに集めるのである。

こゝまでは少し辛抱すれば観察が可能であり且つ満足すべき結果を擧げる事が出来る。所が、幼虫の脱出の爲め、瓦狀に並べた二列の薄板の蔭に出口を設けてあるあの中央帯の極めて複雑な構造に至つては、到底觀察する事が出来ない。私がやつと見定め得た僅かばかりの事實は要するに次の如くである。腹端は上から下へと廣く割れて一種の釘穴を形成し、其の上端は略々固定したまゝで居るが、下端は左右に振動しつゝ泡を作り、且つ卵を其の中に産み込んで居る。してみると儲かに上端が中央帯の仕事を引き受けて居るに違いない。

此の上端は何時見ても尾網によつて掃き寄せられた細かい白泡に包まれながら此の中央帯の延長線上に在る。そして尾網が左右から此の帯を境して居るが、其の邊縁を手さぐり、まるで仕事の進行状態を調べて居るやうである。私は之れをもつて至極面倒な建設を指導して居る極めてデリケートな二本の長い指と見做したのである。

しかし、あの二列の鱗片とあの間隙、其の蔭にある出口、などがどうして出来るか、私には全然分らない。想像して見る事さへ出来ない。此の問題の解決は誰か他の人に譲る。

中核の角質舌、之れを保護する泡、中央リボンの白泡、卵、精液等を、之れ程秩序よく又それ程敏捷に吐き出し、而も之れと同時に累積する薄片、瓦狀に並べられる鱗片、交錯する自由間隙を作る事が出来るとは何と不思議な機構ではないか。見る者をしてまことに嘔然たらしめる。しかもまた其の作業の如何に樂々とは行はれる事か。巢の中軸上に金網にとまつたまゝで蠅螂はちつと動かない。自分の後方に於て作り上げられつゝある物に對しては一瞥をすら投じない。肢をもつて之れを助けると云ふ事も絶對にない。全く獨りで行はれて居るのである。之れは本能の手腕を必要とする巧妙な仕事ではない。道具と組織とによつて調節される純然たる機械の仕事である。これ程複雑な構造の巢もたゞ諸器官の運動によつて出来るのである。恰度、我々の工業に於て指先の技巧を負かすやうな完全な多くの物が機械的に作られるやうなものである。

蠅螂の巢はまた別の點から見ると更に注目し値する。こゝには保温に關する物理學上の最も優れた理論の一つが立派に應用されて居るのである。蠅螂は我々に先じて不透熱體を知つて居るのである。

空氣が熱に對して傳導性の少ない事を證明するに適當な、次のやうな變つた實驗を行つたのは物理學者のラムフォード (Rumford) である。此の著名な學者は凍らせた一塊の牛脂をよく攪拌した玉子

の泡の塊の中に沈めた。そして其の全體を竈の熱に當てた。斯うして幾何もなくして口も焼けさうな膨れたオムレツが出来たが、其の眞中では牛酪が初めと同じやうに冷たかつた。之れは牛酪を包む泡の微粒中に空気が閉ち籠められて居る事を思えば不思議でも何でもない。空気が非常な不透熱體なので竈の熱を阻止し、中央の凍水體に達するのを妨げたのである。

所で、蟻螂はどうするか。正にラムフォードの爲した所を爲すのである。卵白を攪拌して一種の膨らませたオムレツを作り、集まつて中核を爲す所の胚種を保護するのである。尤も彼の目的は逆である。其の凝固した泡は寒さを防ぐ爲めで、暑さを防ぐのではない。しかし一方を防ぐものは他方をも防ぐ事が出来る。それであの巧妙な物理學者は其の實驗を逆にして、同じ泡の被覆を用ゐて、何か冷めたい圍いの中に一つの熱い物體を維持する事も出来たに違いないのである。

ラムフォードが空氣蒲團の秘訣を知つて居たのは、彼の先蹤者が蓄積した所の智識及び彼自身の調査研究によるのであるが、蟻螂は幾世紀とも知れぬ昔からどうして我々の物理學を出し抜いて、此のデリケートな熱の問題を解決し得たのであらうか。小枝の上に、石の上に何等の掩蔽物もなくつつけられて、よく厳しい冬の寒さに堪えて行かねばならぬ其の卵塊を、どうして蟻螂は泡で包む氣になつたのであらうか。

私の附近に居る其の他の蟻螂類は私が充分に事情を知つて語り得る唯一のものであるが、彼等は其

の卵が冬を越すべきものであるかさうでないかに依つて、泡を凝固させた不透熱被覆を使用し或は之を廢止する。あの小さな灰色蟻螂 (*Anelates decolor*) は雌に殆ど全く翅のない點で尼蟻螂と異なるものであるが、やつと櫻桃の核ほどの大きさの巢を作り、一種の泡皮をもつて極めてよく之を蔽ふ。何故此の膨らませた被覆を用ゐるか云ふと、それは此の灰色蟻螂の巢も尼蟻螂の巢と同様に小枝なり石なりの上で悪い季節の風雪に曝されながら冬を過ごさなければならぬからである。

又他方、我國昆虫の中で最も奇妙なアンビユーズ・アポーヅリ (*Empusa pauperata*) は柄だけは尼蟻螂に劣らぬ癖に其の作る巢は灰色蟻螂の巢と同じ位小さいのである。そしてまことにお粗末な建物で小房の數も少なく、二つづゝ並んで三段或は四段をなして支柱にくつついて居る。其處にはあの膨らんだ被覆は全然存在しない。しかも巢は前二種の蟻螂の巢と同様に何かの小枝か石塊の上にむき出しにくつついて居るのである。斯く不透熱蒲團が缺けて居るのは氣候條件が異なる事を語つて居るのである。事實、アンビユーズの卵は産卵後間もなく、未だ好季節中に孵化するのである。嚴冬の虐待を受けないで済むので此等の卵は保護物としてこれ等の鞘で薄く蔽はれて居るに過ぎないのである。

斯うした用心は如何にもデリケートで、又如何にも合理的で、あのラムフォードの膨らませたオムレツと其の妙を競ふのであるが、何れもたゞ一つの偶然の結果であり、偶然の壺から出た無数の組み合わせの一つであらうか。若しさうだとするならば、不條理の前に尻込みする事なく、偶然の盲目もま

た驚くべき明察力を有つて居る事を認めようではないか。

尼蠶螂は其の巢を作るのに鈍角の方から始めて鋭角の方で終る。此の鋭角の方は往々延長して一種の岬を爲して居るが、此處は卵白液の最後の一滴が引き伸ばされつゝ使ひ切られた所である。一回約二時間の間断なき働きが此の仕事全部を完了するに必要である。

産卵が済むと早速母虫は全然無關心な態度で引き揚げてしまふ。私は彼女が振り返つて、我が子等の搖籃に何等かの愛情を示すだらうと思つて居た。けれども母性の喜びの色は少しもない。仕事が完成してしまふともう全く相關する所はない。何疋かのバツタがそれに近づいて行つた。そればかりか中の一疋は其の巢の上に陣取りさへもした。蠶螂は斯うした邪魔者共に何等の注意をも拂はない。尤も此の邪魔物どもが至極平和な連中である事は事實である。しかし、若し彼等が危険な連中で此の卵箱を打ち破りさうな様子をしたならば彼女は彼等を追拂ふであらうか。彼女の平然たる態度をみるとどうも私にはさうは思えない。今はもう巢なんか彼女に何の關はりがあるか。彼女はもう巢なんてものを知らないのである。

私は尼蠶螂の多度の交尾と殆ど常にありふれた獲物として食はれてしまふ雄の無殘な最後とを語つた。二週間の間に私は同一の雌が七回まで婚姻を繰り返したのを見たのである。此の寡婦は實に諦めがよくて其の度毎に夫を食つてしまつたのである。斯うした習性は多度の産卵を豫想させる。そして

事實さうした場合があるが必しもそれが通則だと云ふわけではない。私の産婦たちの中でも或るものはたつた一つの巢しか作らなかつた。またあるものはどちらも同じ位大きな巢を二つ作つた。一番多産なのがそれを三つ作つたが、最初の二つは普通の大きさで第三のは普通の大きさの半分にして居た。

此の最後の例によつて我々は蠶螂の卵巢がどれ位の卵を藏するかを知る事が出来る。巢の横溝によつて卵層の數を知る事は容易であるが、其の層に含まれる卵の數は、その層が楕圓形の赤道線上にあるかそれとも兩極端にあるかによつて甚だ異なる。最大層の卵數と最小層の卵數とによつて平均數を得、之れによつて概算的に總數を割り出す事が出来る。さう云ふ風にして私は一つの大きな巢が約四百の卵を含んで居る事を見出したのである。隨つて三つの巢を作つた産婦は、最後の巢が他の巢の半分として約一千の胚種を子孫として残したわけであり、二回産卵した者は八百を残し、最も少産のものも三四百を残したのである。其の何れの場合をみるもまことに立派な家族であつて、若し充分間引かれなかつたならば忽ち過剰に苦しむ事であらう。

あの可憐な灰色蠶螂は之れに較べると遙かに少産である。私の鐘形籠の中では僅に一回の産卵しかせず、其の巢は精々六十程の卵を含むに過ぎない。同じ原理に據つて作られ、之れ亦むき出しにくつつけられて居るに拘はらず其の作る所の巢の尼蠶螂の巢と著しく異なる點は、先づ其の大きさであつて甚だ小さく、長さ十ミリメートル幅五ミリメートルを算するに過ぎず、次には構造上の幾つかの細か

い點である。此の巢は驢馬の脊形に作られ、兩側は彎曲し、中線は僅に齒狀を呈する稜線をなして突起して居る。約十個程の溝が、多少の差はあれど各卵層に相當した位置で巢を横に掘り窪めて居る。此の巢には瓦狀に並んだ短い薄片の脱出帯もなく、出口の交錯して居る雪狀リボンもない。全表面は、附着部に至るまでも、一様に細かい小泡のある茶褐色の光澤ある皮で蔽はれて居る。其の初端は尖弓形をなし、末端はぶつとりと切れて、上方に短い蹠爪を伸ばして居る。卵は層をなして並んで居り、多孔質ならぬある物質の中に嵌め込まれて居るが、其の物質は一見角質様で、押しても容易にへこまない一種の母岩をなして居る。其の全體が一つの中核を爲しそれを包んで泡の皮がある。尼蠟螂と同様灰色蠟螂は夜中に其の巢を作るので觀察にはまことに不便である。

柄は大きいし、構造は妙だし、それに石とか藪とかの上にあつてよく人目につくので、尼蠟螂の巢はプロヴァンス地方の百姓の注意を惹かずには居る事は出来なかつた。事實、其の巢は田舎でよく知られて居り、テイニヨなる名を與えられて居るばかりか名聲なかく高いものである。しかも唯一人として其の起原をたづねたものはないやうである。私があゝ有名なテイニヨはあの通俗な祈り虫の巢だと教えてやると、附近の田舎人たちは何時も事の意外に驚いて居るのである。斯うして其の巢が何物であるかを知られて居ないのは全く、蠟螂が夜中に産卵するが爲めかも知れない。此の虫は夜の神祕の中に其の巢を營んで居る所を曾て見つけられた事がない。それで作り手も作られた品もどちら

も村で皆が知つて居るに拘はらず、其の兩者の間に連絡が缺けて居るのである。

其れは兎に角、此の不思議な物は存在し、人目をひき、人の注意を捉える。それでこれは何かに役に立つに違いない。何か効能があるに違いない、とかうまあ何時の時代でも考えの單純な人達は不思議なものを見さへすればそれが何か我々の苦惱の藥になるものと思つて理窟をつけたものである。

プロヴァンス地方の村の藥局では云ひ合せたやうに、テイニヨを以て凍傷の特効藥と誇つて居る。其の使用法は至つて簡單である。此のテイニヨを二つに切つて押しつぶし、汁のしたたる切口でもつて患部を擦るのである。不思議によく効くと云ふ事である。指が紫色に腫れて痒みを覺える者は昔からの慣例に従つて必ずテイニヨの厄介になる。がそれで實際に癒るだらうか。

癒ると誰もが信じて居るけれども、私はどうも疑はないでは居られない。それと云ふのは一八九五年の冬に私と私の家の二三の者との試みた結果が面白くなかつたからで、此の冬は寒さが厳しく且つ永く續いた爲めに皮膚を冒される者が非常に多かつたのである。我々の中の一人と雖も此の有名な塗藥を塗る事によつて指の霜腫の減退を見た者はなかつた。潰したテイニヨの蛋白質を塗つても其の痒みが少しでも鎮まつたのを感じた者はなかつた。他の人々の所でも同じ様に不成功だつたに違いないと思はれる。それでもなほ民間に於ける此の特効藥の名聲は依然として盛であるが、恐らく其の原因は單に此の藥と此の病氣とが同じ名前だからなのであらう。蓋し、プロヴァンス語では凍傷の事をテ

イニョと云ふのである。昆蟲の巢と凍傷とが同じ名前である以上前者の効能は明らかではないか。斯う云ふ風にして評判と云ふものは生まれるのである。

私の村及び恐らくは其の周圍幾里かの地方では、テイニョ——此の場合は蠶の巢を意味する——は又驚く可き齒痛の薬として推稱されて居る。單にそれを身につけて居さへすればそれで齒の痛みが癒やされるのである。善良な女房たちは善い月を選んで之れを取り集め、箆の隅に大切にしまつて置く。手巾を取出す際に落して無くすといけないと云ふので衣兜の底に縫ひつける。若しどの臼齒かが痛むやうな事でもあると近所同志で貸しつこをする。「テイニョを貸してお呉よ、とても痛むんだよ」と齒の痛い女が頬を腫らして云ふ。相手は大急ぎで縫目を解いて其の貴重品を渡してやる。「どうか失くす事だけはしないでくれよ、もうこれつ切りしか無いんだからね。それに最善い月は過ぎちやつたのだからね」と頼む。

此のとんでもない齒痛薬を笑はないがよい。新聞紙の第四頁にれい／＼とのさばつて居る幾多の薬とても其の効能に至つては同じ様なのである。のみならず、斯うした村人の單純な信仰に輪をかけたやうな古の學問が眠つて居る古本も若干ある。十一世紀の英國の博物學者にトーマス・モウフェット(Thomas Moutet)なる醫者があつたが、彼の語る所によると田舎で道に迷つた子供達は蠶の巢に其の道を探ねると云ふ。尋ねられた虫は肢を伸ばして行くべき方向を指し示す、そして殆ど絶対に過まる

事がない、と著者は付け加えて居る。斯うした面白い事が素晴らしい濃厚さを以つて語られて居るのである。「神の如き此の虫は、童兒の就いて道を探ねるに、指を伸べて正しき道を示し、示して過まる事稀に、或は絶無なり。」

此の輕信的な物識りは何處で此のやうな面白い物語を見つけて來たのであらうか。英國ではない筈だ、其處では蠶の巢は棲息する事が出來ないのだから。プロヴァンス地方でもない筈だ。其處にはそんな子供らしい道尋ねの跡かたも見出されないから。此の古い博物學者の想像に較べたら私はまだしもあのテイニョの不思議な効能の方がましだと思ふのである。

蠅蠅——孵化

六月半ばの美しい太陽が輝いて居る朝の十時頃に大抵尼蠅蠅の卵は孵化する。巢の中央帯即ち脱出帯は蠅蠅の子等の出て来る唯一の地帯である。

此の地帯の各薄片の下に一つの透明な鈍い突起が徐々に現はれて来るのがみえる、それに續いて二つの大きな黒點が現はれるが、これは眼である。此の幼兒は靜に薄片の下を滑つて半ば抜け出る。それは成虫の形と非常に近い蛹の形をした蠅蠅の子かと云ふに、まだ其處までは行つて居ない。其の途中にある一つの組織で、頭は乳光色で、頑丈で、膨脹して居て、血液の流入の爲めに鼓動して居る。其の他の部分は赤味が、つた黄色である。全體が一つの外皮に蔽はれて居るが、其の下に、大きな黒目が外皮の爲めに曇つて見え、口の諸片が胸の上に押し擴げられ、肢が前から後へと體にびつたりと着いて居るのがはつきりと見える。要するに、肢の極めてはつきりと見える點を除けば、其の鈍角をなした大きな頭と云ひ、其の眼と云ひ、其の細い腹環節と云ひ、又其の船形と云ひ、全體としてみると、鱗のない微少な魚に可なりよく似て居るあの蟬の卵を出たての状態を少しく想はせるものがある。

のである。

してみると之れは、四肢を自由に置いて置いたのでは長くて始末にをへない邪魔物となるやうな虫を、通りにくい隘路を通つて外界へ連れ出す役目をする僅な期間だけの、一體制のもう一つの例となるわけである。己が産屋たる小枝の廊下には木質の纖維が逆立つて居り、既に空になつた抜殻が邪魔をして居るが、其の狭い廊下を通つて出る爲めに、蟬は軟かに滑り出るには此の上なく好都合な船形に襪襟で包まれて生まれて来る。

蠅蠅の子も同じ様な困難に遭遇する。巢の奥の方から曲りくねつた狭い道を通つて抜け出なければならぬので、其のひよろ／＼の四肢を長々と伸ばして居たので其はのやり場に困るのである。高い竹馬や、奪掠用の鋸や、細い觸角など、後刻になれば藪の中で實に有用な器官ではあるが、今の所では脱出を妨げ之れを甚だ困難ならしめ、不可能ならしめるのである。そこで此の虫は襪襟に包まれて生まれ、彼も亦船のやうな形を取るのである。

蟬の例と蠅蠅の例とは無盡藏な昆虫學的鑛山に一つの新しい鑛脈を開いてくれるものである。私はそこから次の法則を掘り出して居るが、之れに類似の他の事實を到處に少しづつ拾ひ集めたならば必ずや此の法則を確證するに違いない。眞の幼虫は必ずしも常に卵から直接に生まれぬ。新に生まれるものが脱出上特別の困難に遭遇するならば、私が今でも相變らず初期幼虫 (larve primaire) と呼ん

で居る所の一つの從組織があつて眞の幼虫状態に先だち、自ら脱出する力無き小虫を外界に連れ出す働きをする。

もとの話に戻つてみよう。脱出帯の薄片の下に小幼虫が姿を現はす。頭部は體液の激しい流入の爲めに膨らんで一種の透明なヘルニヤに變じ、絶えず鼓動してゐる。斯うして破裂の仕掛けが準備される。これと同時に半分鱗片の蔭にかくれたまゝ此の小虫は體を左右に振り、出たり、引つ込んだりする、此の一振動毎に、頭部の體血による膨脹が増して行く。遂に前胸部が脊を丸くし、頭部は強く胸の方へ傾く。外皮が前胸部で破れる。小虫は伸びたり、騒いだり、體を左右に振つたり、曲つたり、眞直になつたりする。足は其の鞘から引き抜かれる。觸角は二本の長い平行線をなして之れ亦抜け出す。虫は最早切れかゝつた一本の紐で巢にくつついて居るに過ぎない。二つ三つ體をゆするとそれで完全に脱出してしまふ。

これが本當の幼虫の形をした虫の姿である。其の後には一種の不規則な紐が、形もない檻襪が残つて居て僅かの風にも細い産毛のやうにゆれて居る。

之れは、檻襪屑のやうになつて居るが、亂暴に引き脱かれた脱出着なのである。

私は灰色蠶螂の孵化の瞬間を見損つてしまつた。私の知つて居る僅かな事は要するに次の如くである。巢の前端に突き出て居る嘴即ち岬の先端に一つの小さな光澤のない白い斑點が見えるが、之れは

碎け易い泡で出来て居て非常に脆い。此の圓い氣孔は、僅に泡状の栓で塞がれて居るだけだが、それが巢の唯一の出口で、他の部分は悉く頑丈に堅められて居る。此の氣孔は尼蠶螂が脱出して來るあの長い鱗片帯に代るもので此處から褪色蠶螂の子は一つづゝ抜け出して來るに違いない。運が悪くてどうも其の抜け出る所を見る事が出來ないが、抜け出したすぐ後で見ると、其の脱出孔の口に、白い抜け殻のふざまな一束がぶら下つて居る。實に薄い皮で一と吹き散らされてしまふ。これは蠶螂の子が外界に現はれた際に脱ぎ捨てた抜け殻で、彼等が巢の迷路を通り抜ける際に運動の自由を助ける一時的の外皮を纏うて居た證據である。してみると褪色蠶螂も亦脱出に好都合な狭い鞘に包まれた其の初期幼虫を有するわけである。六月が此の脱出の季節である。

再び尼蠶螂に戻つてみよう。孵化は巢の卵全體に亘つて同時に行はれるのではなく何週かに分けて、次々とは行はれ、二日の間隔を置く事もあり、それ以上の間隔を置くこともある。普通は、最後に産みつけた卵のある方の尖つた端から始まる。

最後のものを最初に外界に呼び出すと云ふ此の時間的な順位轉倒は恐らく巢の形状が原因をなして居るのであらう。細い方の端は好く晴れた日の刺激を一層受け易いので太い方の端よりも覺醒する事早く、こちらは其の太さの爲めに必要な熱量を細い方ほど速に吸収する事が出來ないのであらう。

しかし時とすると、相變らず幾群かに分れながらも、脱出帯の全長に亘つて孵化の行はれる事があ

る。百疋程の蟻の子が俄然出現し来る光景はまことに見物である。一疋が一枚の薄片の下に其の黒い眼を現はすや否や他の連中が突如多數に現はれて来る。まるで何か振動が次から次へと傳はり、警報が相傳へられるかのやうな有様である。それ程孵化は急速に周圍に傳播するのである。殆ど一瞬の間に中央帯は蟻の子に蔽はれ、それが騒然と動き、破れた衣を脱ぎ捨てるのである。

これ等の敏捷な虫は何時まで巢の上に愚圖々々して居ない。下へ落ちるか附近の青葉の上に攀ち登る。二十分足らずですつかり終る。共同搖籃は舊の静けさに歸り、數日後に改めて一群の子等を送り出す、そして最後まで之を繰り返す。

さう云ふわけで私は何度でも好きなだけこれ等の脱出を見る事が出来た。或は庭の大氣の中でも見た。其處では私は冬の暇な時に殆ど到る處で採集した所の巢を日當りの好い所に懸けて置いたのであった。また静な温室の内でも見た。温室の方が生まれる子たちを一層よく保護し得るだらうとお目出度くも信じて居たわけなのである。一度でよい所を二十度も私は孵化の状況を見たのである。そしてその度毎に忘れ難い殺戮の場面を目にしたのである。胚種を、布袋のやうな腹の蟻が幾千を生んだ所で決して生み過ぎる事はない。卵から生れたばかりの子等を貪り食ふ奴等が待つて居て間引いてくれるからである。

蟻は其の中でも猛烈に殺戮をやる。私は私の並べてある巢の上に毎日不吉な蟻の訪づれを見つけるのである。私は干渉をしてやる、時には随分嚴重に干渉するのだが駄目である、彼等の熱心さは少しも衰えない。彼等は此の要塞に割目を作る事はまあ出来ない——それは餘り困難過ぎる——けれども其の内部で今出来上りつゝある軟かい肉に舌なめずりをしながら彼等は好機會を待ち、出て来るのを窺つて居るのである。

私の毎日の監視にも拘はらず、蟻の子が姿を現はすや否や彼等はちやんと其處に待つて居る。そして其の腹を啜えて鞘から引つ張り出し、寸断する。身を藻掻く他に守る手段もない軟かい嬰兒たちと、豊かな分捕品を大腮の端に啜えた兇暴な追剥たちとの無残な混戦である。

嬰兒虐殺は實にあつてなく終る。さしもの大家族も偶然免れ得た稀少の生存者を残すに過ぎない。未來の昆虫殺し、藪の中ではバツタの恐怖、あの恐ろしい生肉食ひは生まれるとすぐ、極くつまらない昆虫の一つである蟻の爲めに食はれるのである。

此の食人鬼は途方もなく多産だが、こんな一寸法師によつて其の産兒の数を制限されて居るのである。しかし此の殺戮は永くは續かない。蟻は空氣に觸れて少しく皮膚が固くなり、足元がたしかになつて来たが最後、もう之れを襲ふ事は出来ない。彼は群る蟻の中を輕快にちよこ／＼と走り廻る、すると蟻は其の通路を開いてもう之れを捕える事を敢てしない。蟻は捕獲肢を拳闘家が腕を構えたやうに胸に引きつけて、既に其の傲然たる態度によつて彼等を威壓して居る。

彼等の若い肉に對するもう一つの愛好者はこんな脅かしなんか物ともしない。それはあの日當りのよい壁を好む灰色の小さな蜥蜴である。どうして此の生肉の御馳走を知つたものか、ちやんと其處に來て居て、蟻の手を免れてさまよい歩いて居る小さな虫を、其の細い舌の先で、一つづつ摘み上げて居る。一口の分量としてはまことに少ないが、如何にもうまいと見えて此の爬虫類は目をばちくりしぱたゝいて居る。可憐さうな虫を一口吞み下す毎に彼は眼瞼を半ば閉ざす、深い満足のしるしである。



ンエイヂシルカ
(備 五)

私は私の目の前で奪略を行ふ此の大膽不敵な奴を追拂つてやるが、それでもまたやつて來る。今度は彼も其の大膽さに高價を拂はせられるのである。若しも打ち捨てて置いたならばたゞの一疋たりとも残さないからである。

それ全部であらうか。まださうではない。もう一つの荒涼者があるのである。これは形こそは一番小さいが、なか／＼に怖るべき奴で蜥蜴及び蟻に先鞭をつける奴である。それは極めて小さな膜翅類の一種で一本の消息子を有し、カルシディエン(chalcidien)と稱する小蜂で新しい巢の中に其の卵を産みつけるのである。蟻の巢は蟬の巢と同じ運命を帯びて居る。一種の寄生虫が其の胚種を襲うて卵を空にしてしまふのである。私が採集した蟻の巢の多數から私は全然或は殆ど何物をも獲る事が出来なかつた。カルシディエンが既に見舞つたのである。

知られたのもあり知られぬのもある種々の殺戮者が私に残して置く所のものを採集しよう。孵化したばかりの幼虫は光澤がなく、薄黄色を帯びた白色である。其の頭部のヘルニヤは直きに小さくなくなり消え失せてしまふ。其の色は直きに濃くなり始めて二十四時間も経つと薄い褐色になる。小さい蟻は極めて敏捷で其の捕獲肢を上へ伸ばし、開いたり、閉めたりする。頭を右に向け左に向ける。腹を反らせる。完全に發達した幼虫とても之れ以上に輕快な運動を行はない。數分間この子等は巢上に停まり、蠢めき、それから地上に、附近の植物の上に、あてもなく散つて行く。

私は此の移住者數ダースを私の鐘形蓋の下に容れる。これ等未來の女獵師たちを何を以て養つたものであらうか。生餌を以て養ふ事は此の上なく明らかではあるが、さてどんな生餌をもつてするか。かうした極微小な虫には微分子のやうなものしか與える事が出來ない。私は綠色のアブラムシを着けた一本の薔薇の小枝を與えてみる。所がお客様のか弱さに釣り合つた此の肥つた軟かい木虱は絶対に輕蔑される。一疋たりとも之れに手を出すものはない。

網で草の中を掻き廻はして偶然飛び込んだ虫の中で一番小さな蚋を與えてみる。やはり同じやうに頑固に拒絶する。

蠅の切れを鐘形籠の金網のそこ／＼に引つ懸けてやる。一疋たりともこんな獲物の肉の切り端しなにか受けつけない。成熟した蟻の熱愛するバツタ、これなら多分彼等を誘惑するかも知れない。大

掛りの搜索の結果私は自分の望む所のものを手に入れる。今度は献立は最近に孵化したばかりの蝗虫類若干から成るわけである。所で如何に若いにせよ彼等は既に私の養ひ兒程の柄がある。蟻の子が果してこれを欲するであらうか。欲しない。こんな小さな餌食に怖毛を振つて逃げるのである。

一體お前たちは何がほしいのだ。天然の藪では之れ以外のどんな獲物を見出す事が出来るのか。私には想像もつかない。お前たちには幼年時代の特別の食養法があるのか知ら。多分は菜食主義なのか知ら。そんな筈はないと思ふがまあやつてみよう。蒿苳の心の一番軟かい所もお断り。いろ／＼と苦心して種々の草を取り替えてやつてみても駄目、ラヴァンダの穂の上に蜜を滴らしてやつても駄目、あらゆる私の試みは失敗して、私の捕虜たちは餓死してしまふ。

此の失敗にはそれだけの價值がある。それは私の發見し得ない何か一時的の榮養物のある事を證明して居るやうである。曾てメロイドの幼虫が随分私を手古摺らせた事があつたが遂に最初の食物としては蜜蜂の卵が必要であり、蜜を吸つた後には之れを食ふと云ふ事が分つたのだつた。蟻も亦最初のうちは其の弱さに釣合つた特別の食物を要求するのであらう。如何に決然たる様子をして居るとは云へ、此の弱い虫が獲物あさりをやる有様を想像する事はどうも出来ない。襲はれた者は、それがどんなものであらうとも、蹴つたり、ぢたばたしたりして自己を守る。しかも襲ふ者は未だ蛹の羽根の一撃をすらも防ぎ得ぬ状態なのである。一體何を食べて居るのか。私は此の幼年時代の食糧問題

に關してなほ摘みのこされた若干の興味ある事實があらうとも決してそれを意外としないのである。

これ等の實に養ひ難い高慢ちきな連中は餓死よりもつと悲惨な死に方をするのである。生まれたか生まれないに、此の美味い食料の孵化するのを辛抱強く窺つて居る蟻、蜥蜴及び其の他の荒掠者の餌食となるのだが、卵そのものすらもが尊敬されないで、極く小さな、消息子を有つた虫が固まつた泡の城壁を突き通して巢の中に産卵し、其處に我が子等を住まはせる。すると此の子等は蟻の子等よりも早熟で蟻の子等を胚種のうちに滅してしまふのである。召さるゝ者の何と多くして、しかも選ばれる者の何と少い事か。三つの巢を作り得る一疋の母虫から生まれて彼等の數は恐らく一千を算した事であらう。しかもたゞ一組だけが襲殺を免れ、唯々一組だけが子を産むのである。何故かと云ふに蟻の數は毎年ほど同じだからである。

こゝに重大な問題が生ずる。蟻は現在のやうな多産力を次第に獲たものであらうか。蟻や其の他に間引かれて子孫の數の減するに連れ、過度の生産によつて過度の破壊を埋め合はせる爲めに、益々多くの胚種をもつて其の卵巢を膨らせて行つたものであらうか。今日の莫大な産卵は昔時の破壊の結果なのであらうか。さう考える人も若干ある。確な證據があるわけではないが、動物界の變化は四圍の状況によつて更に深く齎らされると見る傾きの人たちである。

私の部屋の窓の前の、池の堤の上に一本の素晴らしい櫻の木が立つて居る。偶然此處に植ゑられた強

い野生の木で、私の先住者たちには一向面白くもなかつたのだが、今日では其の品質の甚だ劣つて居る果實の爲めよりも遂かに其の廣々と伸ばした枝振りの爲めに尊敬されて居る。十月には素晴らしい白繻子の圓天井を現出する。其の樹下には雪が降り、花葩は散つて毛氈を敷く。やがて夥しく實が赤らむ。いや實に美事な私の櫻樹よ、お前は何と云ふ浪費者だ、どれ程の果物籠を満たす事であらう。

そこで、樹上では何と云ふお祭だらう。先づ第一に雀が櫻ン坊の熟したのを知つて、朝に夕に、群をなして來り、實を啄み、囀り通す。彼は附近の友達に知らせる。するとミヤマホジロや頬白が飛んで來て、幾週間も打つ續けの大御馳走をやる。蝶は傷のついた櫻ン坊から櫻ン坊へと飛び廻つて美味い汁を吸ふ。ハナムグリは實にがぶりと噛みついては食つた擧句満腹して睡り込む。蜂や黄蜂は此の甘い革袋を突破る。さうすると其の後え小蠅がやつて來て飲み酔ふ。一疋の肥つた餉虫が所もあらうに果肉の眞ん中に構え込んで、水氣たつぶりの己が住居をもつて安穩に腹を拵らへ、肥り、脂が乗つて來る。食卓を離れると洒落た蠅に變るのである。

地上では他の賓客達が饗宴に連つて居る。落ちた櫻ン坊に多數の徒歩者が集つて歡樂を味つて居る。夜に入ると、野鼠が出て來て、鼠婦や、缺虫や、蟻や、蛭蟪などの食ひ残した核を曳いて行き、彼等の穴の奥深く埋藏する。冬のおつれに之れに孔を穿つて其の中の實を噛ちるのである。實に數限りない程の虫が此の寛大な櫻のお蔭で生きて居るのである。

他日此の樹に代り、其の美しく調和の取れた姿のまゝに其の種族を維持して行く爲めに、どれだけのもが此の樹に必要なのであらうか。たゞ一つの種子があれば充分であらう。しかも毎年此の木は幾升と云ふ程の種子を生じて居る。一體之れは何の爲めなのだらうか。

櫻も最初の中は非常に果實を節約して居たのだが其の後次第に之れを浪費するやうになつた。そしてそれは彼を搾取する所の無數の者から免れる手段であると云ふのであらうか。櫻に就いても蠕蟬に就いて云つたと同様に「過度の破壊が徐々に過度の生産を促した」と云ふのであらうか。誰がそんな輕率な事を無暗に云はう。櫻の木があつてのすべての元素を有機物に變える工場の一つであり、あの無生物を生物に變える實驗室の一つである事は一目瞭然ではないか。云ふ迄もなく櫻ン坊の熟するのは種の永續の爲めである。しかしそれは少數であり、極めて少數である。若しすべての種子が芽生えて完全に發育しなければならなかつたならばもう久しい以前から、地上にはたゞ一本の櫻を容れる餘地もなくなくなつて居るに違いない。櫻ン坊の量り難い大多數には別の任務があるのである。彼等は植物の如く食ふ可らざる物を食ふ可き物と爲す超絶的な化學に巧みならぬ多數の生物の食糧として役立つのである。

物質は生命の至高の現示に役立ち得る迄には緩慢なそして極めてデリケートな準備を必要とする。其の初めは極く微小なもの、例へば細菌の仕事で始められるのであつて、細菌の或る者は猛烈な電撃

よりもつと強力で、酸素と窒素とを化合して硝酸鹽を作り出すが、之れは植物の最も重要な養分である。それは虚無の境界近くに於て始められ、植物中にて完成され、動物に入つて更に精練される。そして進歩に進歩を重ねて遂に腦髓にまで達し得るのである。

幾何の目に見えぬ働き手、幾何の知られざる操作者が、恐らくは幾世紀の間引き續き働きに働いて礦物を抽出し、それから此の果肉を精製して腦髓を作り出した事か、例へ我々をして「二二が四」と云はしめる事しか出来ないにしてもまことに驚く可き魂の道具たる此の腦髓を！

打ち揚げられた花火はいよ／＼昇りつめると目も眩むばかりの多彩の光となつて開く、それからすべては再びもとの闇に歸る。其の煙、其の瓦斯、其の酸化物から他の花火玉が植物を通じて遂に再び作り上げられる事にもならう。物質と云ふものはそんな風に變形をするのである。一つの階程から他の階程へと、一つのデリケートな精練から一層デリケートな他の精練へと登り登つて遂に頂上に達すると其處で此の物質を仲介として偉大な思想が燦然と輝き出づる。それから此の努力の爲めに碎けて再び舊の名も無き物に、生物の共通の起源たるあの微分子的崩解物に戻るのである。

有機物を組み立てる者の先頭に立つものは植物であつて、之れは動物よりも年長者である。植物は今日も地質學的時代に於けると同様、更に高度の生物に直接或は間接に食料を供給する所の第一人者である。彼の細房の仕事場では萬物共通の食物が調理され、少なくとも下拵えされる。動物が來て此

の調理を修正し、改良し、そして之れを他の一層高度の種類に引き渡す。芝草は食まれて羊の肉となり、羊の肉は之れを食ふ者によつて人間の肉ともなり狼の肉ともなる。

植物は礦物をもつて完全な有機物を創り出すのだが、さうでない榮養原子調合者の中で一番多産なのは骨節動物の初生兒たる魚である。鱈に向つて彼の幾百萬と云ふ卵をどうするかと訊ねてみるがよい。彼の返事は幾十億の實を着ける所の毛櫛の答えであり、幾十億のどんぐりを着ける所の櫛の答えであらう。

鱈が驚く程多産なのは驚く程多くの餓者を養はんが爲めなのである。彼は其の昔、自然が未だ有機物に乏しくて當初の勞僕等に驚く可き生産力を與える事によつて、其の生命的準備を増加するに急であつた時代の彼の先驅者等の事業を續けて居るのである。

蠐螬も魚と同様これ等の遠い昔に溯るものである。其の形の奇怪な事、其の殘虐な習性はよくその事を語つて居る。彼の卵巢の豊富な事は之れを繰り返えし語るものである。彼女は其の昔樹状をなした羊齒の葉の濕つばい蔭で兇暴な力に驅られて多産して居つた頃の名残を其の腹中に留めて居るのである。彼女は崇高な生物鍊金術に甚だ僅少ではあるが、しかし實際に參與して居るのである。

彼の仕事をもつとよく究めてみよう。芝草が大地に養はれて青々と茂る。バツタが之れを食ふ。蠐螬はバツタを食つてそして卵で膨れ上る。卵は三包みに産みつけられて其の數約一千。孵化すると蟻

がやつて来て此の巢立つた子等の多數を買物として取り上げる。何だか退化したやうに思はれる。容積から云ふと如何にもさうであるが精練された本能と云ふ點から云ふと確かにさうではない。此の點に於て蟻はどれほど蠅螂に優れて居る事か。のみならずめぐる因果の輪は之れで終つて居るわけではない。

蟻の子がまだその繭——俗に蟻の卵——に包まれて居る頃之れを食つて雉の子が育つ。雉は肥らせた若牝鶏や閹鶏と同じ資格の家禽であるが飼育に費用と手数のかゝるものである。充分發育すると之れを森に放ち、文明人と自稱する人々が之れに銃弾を打ち込んで無上の快樂とする。可愛さうなのは雉達で、雉飼養所とは云ひながら何の事はない家禽小舎の中で育てられたので逃げる本能を失つてしまつて居るのである。金串が要求する所の若鶏は其の咽喉を切るのであるが、もう一つの若鶏である所の雉は大狩獵の華美を盡して銃殺するのである。私には何の爲めにこんな馬鹿げた虐殺をやるのか分らない。

タルタラン・ド・タラスコン(Tartarin de Tarascon)は獲物がないので自分の帽子を打つたものである。私は其の方が好きである。殊に私はもう一つの熱烈な蟻食家キバシリ鳥の獵の方が好きである。キバシリ鳥と云ふのはプロヴァンス人の所謂「舌出し」であつて、其の途方もない粘々した舌を出して蟻の行列を横に甜め、舌が蟻で眞黒になると急に之れを引つ込めると云ふ其の技巧の故に斯う呼ば

れて居るのである。斯う云ふ食ひ方をして居るので、此の鳥は秋になると途方もなく脂つくくなる。髯も翼の下も脇腹もバタで蔽はれ、頸にはすつと其の珠數が出来、頭蓋は嘴の着根までそれで包まれる。

さうなるととても美味いやき鳥である。何しろ精々雲雀位の大きさしかないのだから、小さいと云ふに異論はないが、其の小さい中に他に比類ない味を有つて居る。之れに較べたら雉などは下の下である。何しろ相當な味を出す爲めには是非とも腐り始めなければならぬのだから。

私もせめて一度位は最も賤小ものの功績を認めてやりたいものである。私は夕食後の食卓が取り片づけられ、静になつて、身體が一時生理的のさまゝな悩みから解放されると、其方此方から何かよい考えを拾ひ集める事があるが其の時、蠅螂、バツタ、蟻、それよりなほ一層小さい虫共が何故とも知れず、またどのやうにとも分らず心の中に湧き出るあの不意の冥想に寄與して居ると云ふ事もあり得るのである。解き難い迂餘曲折を経て彼等は各自特有の方法で思想の燈心をしめらせる油の雫を提供して居るのである。先行者等によつて徐々に粗造され、貯蓄され、相傳えられた彼等の精力は我等の脈管中に注入されて我等の氣力の衰弱を支えるのである。我等は彼等の死によつて生きて居るのである。

結論をしよう。途方もなく多産な蠅螂は今度は自ら有機物を作つて居るのであり、其の作つた有機

物を蟻が相續し、それをキバシリ鳥が相續し、それを多分は人間が相續すると云ふわけなのである。蠶螂は千の子を生むが、種の永續に充てるのは其の少數であつて多數は生物の總遊山に分相應の寄與をする爲めである。蠶螂のやり方は己が尾を噛む蛇の古い象徴に我等を引き戻すものである。世界は廻り廻つて舊に歸る一つの輪であつて、すべてのものの終るはすべてのものの再び始まらんが爲めであり、すべてのものの死するはすべてのものの生きんが爲めである。

二二二

アンビユーズ

海は生命の最初の養ひ親で、今猶ほ其の深淵中に多數の奇怪な不均勢な形を保存して居るが、これは動物界の試作だつたのである。陸地は、海ほど多産的ではないが、これよりも進歩に適して居るのて其の往時の怪物を殆ど全部失つてしまつた。今猶ほ残存する僅かばかりのものは殊に原始的昆虫類に屬するもので、これ等の昆虫は其の技巧の範圍まことに狭く、變態は甚だ簡單であり、殆ど絶無である。我が地方に於てこれ等石炭紀の森林の住者を想はせる昆虫學的異常の第一位にあるものは蠶螂類であつて、習性構造ともに誠に不思議な尼蠶螂は其の一部をなすものであるが、本章に語らんとする所のアンビユーズ (*Empusa pauperata* Latr.) 亦之れに屬するものである。

彼の幼虫はまことにプロヴァンスの陸棲動物中最も不思議な動物で、ほつそりとした身體を絶えず右左に振つて、其の様子が如何にも不思議なのでまだ慣れない者は一寸指で掴む氣になれない程である。私の附近の子供たちは其の異常な様子に驚かされて之れを惡魔の子と呼んで居る。彼等の想像では此の變な虫は魔物に近いのである。此の幼虫は常にまばらに見出されるが、春は五月迄で、それか

ら秋と、冬にも太陽の輝かしい時には時として見出される。瘠せ地の堅い芝生、いくらかの石塊の山に守られた日當りのよい低い荆棘、等が此の寒がり屋の好んで住まふ所である。



11/4 ステンボス

簡單にスケッチしてみよう。腹部は何時も脊に觸れる迄に持ち上げられて居るが、筥のやうに擴がり牧杖の頭のやうに渦巻いて居る。數枚の尖つた薄片が、葉狀の突起をなして、三列に並び、捲くれ上つた結果上面となつた腹下面に逆立つて居る。此の鱗片で蔽はれた牧杖頭は四つの細長い竹馬の上に高々と乗つて居り、膝當を裝うた四本の肢、即ち、腿の末端、脚との接合點に肉切庖刀の刃に似た突出した彎曲した刃を有する四本の肢の上に高々と乗つて居るのである。

此の四本足の臺に似た基礎の上方に急角度をなした硬直な、法外に長い、そして垂直に近い前胸甲が突つ立つて居る。此の一本の麥藁のやうに圓く細い胸の上端に獵用鼠が、蟻螂のそれに模した捕獲肢がある。其處には先端の鋸がある。一本の針よりもなほよく砥ぎすましてある。鋸のやうな齒のついた腮を有つた恐ろしい萬力がある。腕によつて形作られて居る腮には一つの溝が穿たれて居り、其の各々の側に五本の長い針を有し針と針との間には更に小さい鋸齒形の切り込みがある。前腕によつて形作られて居る腮は之れ亦同様

に溝を穿たれて居るけれども、其の二重鋸は休息状態に於ては腕の溝の中に收められるので前よりも一層細かい、一層密生した、一層規則正しい齒から成り立つて居る。虫眼鏡でみると一列に約二十の一樣な尖つた齒が數えられる。之れで形さへ充分に大きかつたならば正に怖るべき拷問道具である。

頭部は此の怖ろしい道具立てに似つかはしいものである。いや、實に奇妙な頭ではある。尖つた面にガイゼル髭そのままの觸鬚をつけ、大きな眼が飛び出し、其の二つの間に一つの短劍、一つの鍔附槍の刃がある。そして額の上には何か前代未聞の、馬鹿々々しいものがある。一種の高い僧帽とでも云つたやうな途法もない帽子が岬のやうにそり立ち、左右に張り出して小翼をなし、頂上は二分された雨樋形に溝を穿たれて居る。此の悪魔の子はこんな怪奇な尖つた帽子をもつて何が出來ようと云ふのか。東方の博士たちだつて埃及のヘルメス神の秘技の達人だつてこれ以上に奇妙な帽子を決して冠つた事はないのに。所が彼が獵をする所を見るとそれが分るのである。

彼の服装は平俗で、灰色が勝つて居る。幼虫期の末になると二三回の脱皮の後に彼は之れよりも豊麗な成虫の服装をちら／＼と窺かせ始め、未だ極く漠然とではあるが、緑が／＼つた色や、白や、薔薇色の帯を現はして來る。觸角には既に兩性の別がはつきりと現はれる。未來の母は糸狀の觸角を有し、未來の雄は其の下半部を紡錘狀に膨らませ、之れをもつて一つの袋を作るが其處から後に至つて洒落た羽根飾が出て來るのである。アンビニューズの幼虫と云つたらまあこんな按配で、まことにあの想像

に富んだカロ（Callot）の筆によつてはしつものである。若し諸君にして藪の中で之れに出會ふならば、其奴は其の四本の竹馬の上で身體を左右に振り、頭をこつくり／＼と動かし、如何にも呑み込んだやうな様子で諸君を眺め、頸の上の僧帽をくる／＼と廻はし、そして肩越しに様子をうかがふ。其の尖つた顔に悪意の色が讀めるやうに思はれて、其奴を掴まえやうとする。忽ち其の華やかな姿態はやむ。今まで突立つて居た胸は下り、其の虫は捕獲肢まで使つて其の肢で小枝を引つかみながら大股に逃げ出す。少し目が利いて居ればさう何時までも逃げさせては置かない。其のアンビユーズを捕まえてしまふ。そして其の弱い四肢を挫かないやうに紙の角袋に入れ、遂に金網の鐘形箱の中に圍つてしまふのである。十月に私は斯う云ふ風にして充分の群を獲る事が出来た。

どうして之れを養ふか。私のアンビユーズはまことに小さい。生まれて一ヶ月か精々二ヶ月に過ぎない。私が見出し得たバツタの中で一番小さい、彼等の大きさに均合つたのを與えて見る。食はない。それ所か却つて怖ろしがつて居る。若し迂闊者が金網の圓天井に後の四肢でぶら下つて居る彼等の中の一疋に穩かに接近して行かうものならば、此の邪魔物はとんだ待遇を受ける。あの尖つた僧帽が下つてそして突きの一撃で彼を遠方にとんぼ返りさせる。之れで分つた。あの不思議な帽子は一種の防身具であり、一種の保護蹴爪なのである。牡羊は其の額で衝擊し、アンビユーズは其の僧帽で突き飛ばすのである。

しかし之れでは食事にならない。そこで家蠅を生きたまゝ與えてみる。之れは躊躇なく受け容れられる。此の双翅類が手近の所へ来るや否や待伏せして居た悪魔の子は頭を廻はし、胸軸を斜に傾け、そして肢を投げ出して銚を打ち込み、其の二重銚の中に押さえつける。猫が鼠を捕える所だつて之れ以上に輕快ではない。

獲物は如何に小さくとも一食分として充分である。まる一日分としても充分であり、屢々數日分とするに足りる。第一の幻滅、これ程の怖ろしい道具立てを有つたこれ等の虫の極度な小食振り。私は食人鬼のやうな奴に違ひないと思つて居たのだが、實は時たま貧弱な小食を與えればそれで満足して居る節食家に過ぎないのである。一疋の蠅は少くとも二十四時間は彼等の腹を満たして居るのである。

そんな具合で晩秋も過ぎ、アンビユーズは日増しに小食になり、金網にぶら下つてちつとして居る。彼等の天性の斷食は私に取つて天の佑けである。蠅はだん／＼と稀になつて行つて、しまひには若し此の虫小舎の連中に食糧を供給しなければならぬとしたら、私は此の上なく困つてしまふ日が来るからである。

冬の三ヶ月間は何一つ動かない。天氣の好い時には時々鐘形箱を窓に出して日光に當ててやる。此の日光浴に温まると捕虜たちは四肢を少しく伸ばし、身體を振り、思ひ切つて場所を變えるが、決して食慾は起つて來ない。私が熱心に探した學句幸運に恵まれてやつと手に入れた稀な小蠅も彼等を誘

ふやうに見えない。彼等に取つては完全な断食の中に寒い季節を過すのが通則なのである。

私の鐘形籠によつて彼等が冬の間野外でどうして居るかを大抵想像する事が出来る。一番日常りの好い小石の凹みなどに隠れて若いアンビユーズは、身體をかじかませたまゝ春暖の來復を待つのである。一と山の小石の蔭に隠れては居ようとも、霜凍る寒さの永く續く時、雪水の何處とも知れず流れ來て此の一番よく保護された一角をまでも潤ほす時、随分過ごし難い幾瞬間があるに違いない。それにも拘はらず、これ等の蟄居者は見かけに似ず頑丈であらゆる冬眠の危険から免かれる。時として、日の光の強い時には、彼等は思ひ切つて其の隠れ家を立ち出で、春が近いかどうかを覗ふのである。果して春はやつて來る。時は三月、私の捕虜たちは身體を動かし、色を變える。彼等にも食糧が必要になる。私の食糧補給の心配が再び始まる。家蠅は捕え易いのだが此の頃は居ない。そこで之れよりももつと早熟の双翅類エリスタルを襲ふ。所がアンビユーズはそんなものはいやだと云ふ。彼等に取つて餘りに大き過ぎるし、餘りに激しく抵抗するからである。彼等は僧帽を振つてその接近を防いで居る。

或る種の蝗虫の極く若い奴は肉も軟いので非常に歓迎される。所が不幸にして其のやうな意外な儲け物は私の捕虫網の底に見出される事が稀である。そこで彼等はいやでも最初の蝶の出るまでは断食して居なければならぬ。最初の蝶と云ふのは玉菜に飛ぶ白い蝶ピエリド (Pieris) で、それが出る

と其の後は大抵それを食糧に供する。

此の白蝶を生きたまゝ鐘形籠の中に放してやるとアンビユーズは絶好の獲物とばかり之れを狙ひ、之れを捕えるが、忽ちまた放してしまふ。まだ之れを制禦し切れないのである。蝶の大きな羽根が空を打つて彼の身體をこびり廻はすのでどうにも仕方がなくて手放すのである。そこで私が加勢してやる。缺で餌食の羽根を切つてやるのである。此の腕無しどもは相變らず元氣一杯で金網を攀ぢ登る。さうすると早速アンビユーズが之れを引つ掴んでその反抗を物ともせず之れを嚼ちる。此の料理は彼等の口に合ふ。蠅に劣らない。しかも分量が澤山にある。それで何時も残りが捨てられて居る。

頭と胸の上部だけが食はれる。其の残りの、ぼつちやりした腹や、胸の大部分や肢や、それにまた——云ふ迄もない事だが——切り残りの羽根などは其のまゝ手もつけずに投げ捨てられる。之れが一番軟い、一番美味しい特別料理なのだらうか。いやさうではない。何故かと云ふに腹の方が汁氣が多くてうまいに違いないのに、アンビユーズは蠅ならば最後の一片に至るまでも食つてしまふ癖に之れを欲しないからである。それは戦術なのである。彼も亦じたばた騒いで食べ悪い餌食を手つ取り早く殺す術にかけては蠅に劣らず練達の後頭手術者だつたのである。

さうと分つて調べてみると果して獲物は蠅であらうが、バツタであらうが、蝗虫であらうが、蝶であらうが、何であらうとも必ず頸の後部をやられて居る。最初の一と嘴みは頸の神経節を滅する點に

加へられて居る。其の爲めに突然の死が来り、不動が来るのである。相手の完全な無力によつて消費者はあらゆる御馳走の第一の條件たる氣安さを得る事が出来るわけなのである。

そこで此の小悪魔も、こんなに弱々しいくせに、餌食の抵抗を即座に封じてしまふ秘訣を心得て居るのである。彼は先づ後頸を噛んで止めの一撃を與へ、それから其の最初の攻撃點の周圍を噛みつゞける。斯うして蝶の胸の上部と頭とが消えて無くなるのである。しかもそれで此の獵師は満腹するのである。實に僅かしか要らないのである。残りは取るに足らぬものとして地に落とされるが、それは味が悪いからではなくて、過剰だからである。白蝶一疋では彼の胃力を遙かに超過するのである。お下りは蟻の儲け物となる。

彼の變態をみる前にもう一つ明らかにして置かねばならぬ點がある。若いアンビユーズが金網の鐘形籠の中にとまつて居る方法は始めから終りまで不變である。後の四肢の小爪で金網にしがみついて圓天井の天邊を占め、此の四つの懸垂點に體の全重を託して、脊を下に、凝つとぶら下つて居る。場所を變えようと思ふと前の銛が開き、伸び、金網の一目をつかんで引つ張る。此の短い散歩が終ると録肢は胸に疊み込まれる。要するに、殆ど常に後ろの竹馬のやうな四肢だけが此のぶら下つた虫を支えて居るのである。

しかも我々に取つては實に苦しさうに思はれる此の仰向けの位置は短い間の事ではない。私の虫小舎では約十ヶ月の間引きりなしに續いて居る。天井にぶら下つた蠅も同様な位置にあるには違ひないが、蠅には休息の幾瞬間がある。蠅は飛んだり、普通の姿勢で歩いたり、日當りに腹這つたりする。それに又、蠅の輕業修業は短い間の事である。

休みなく十ヶ月間引き續きアンビユーズは此の不思議な釣合を保つて居るのである。仰向けに金網にぶら下つたまゝで獵し、食ひ、消化し、假睡し、脱皮し、變態し、交尾し、産卵し、そして死ぬ。極く幼くして其處に攀ち登つた彼は永の月日に飽きあきして死骸となつて其處から落ちるのである。

自然の狀態に於ては萬事が全然かう云ふ風に行はれるわけではない。虫は藪の上に脊を上にしてとまつて居る。彼は普通の姿勢で身體の釣合ひを取つて居る、時たま何かの事情でのけ反る事を繰り返えずに過ぎない。私の所に監禁された虫が永い間仰向けにぶら下つて居る事は、それが彼の種族に取つて普通の事でないだけに一段と注意に値する。

其れは洞窟の天井に、頭を下にして、後足でぶら下つて居る蝙蝠を想はせる。鳥は指の特殊の構造によつて一本足で眠る事が出来る、其の足は機械的に、疲れる事なく、其の揺れて居る小枝を握りしめて居るのである。アンビユーズには見た所此の仕掛に似た何物もない。彼の歩行用の肢の先端は普通の形をして居て、其の端に天秤衡の二重鈎のやうな二重の爪がある。それつきりである。

若し出来る事ならば解剖によつてこれ等の附の中で、糸よりも細いこれ等の脚の中で、小爪を指揮

し、十ヶ月の間寝ても醒めても疲れる事なく小爪を握りしめさせて居る筋肉や、神経や、腱の働きを示して貰ひたいものである。若し誰かが利き解剖刀を振つて此の問題を研究してくれるならば私はアンビニューズや、蝙蝠や、鳥の問題よりも更に不思議なもう一つの問題を其の人にお頼みしよう。それはある種の膜翅類の夜の休息中の姿勢である。

前足の赤いジガバチ (*Arthropia holosericea*) は八月末に方つて屢々私の庭に姿を見せるが、其の寢室として何處かラヴアンドの植込みを選ぶ。黄昏頃、殊に日中が蒸し暑くて雷雨を催して居る時にはきつと此の不思議な眠り虫が其處に構え込んで居るのを見出す事が出来るのである。いや實に不思議な姿勢でもつて夜休む奴もあるものである。ラヴアンドの莖を腮でがつくりと咬えて居る。此の莖は四角なので圓い形よりも一層しつかりとした土臺となるのである。これを唯一つの支據として、虫の身體は、肢を疊み、硬直して、長々と空中に投げ出されて居る。虫體は支柱の軸と直角をなして居るので、槓桿の腕のやうになつた虫の全重量は腮の力だけで支えて居るのである。

細腰蜂は腮の力で空間に突つ張られて眠る。虫でもなければこんな休息に關する我々の考えと全く相反する考えを起すものはない。催して居た雷雨が遂に勃發するとか、風が莖を揺り動かすとかしても、此の寢坊助は彼のぶらりと揺れるハンモックを少しも意に介しない。精々其の前肢で揺れて居る帆柱の天邊を一寸押さえる位のものである。均勢が恢復すると彼の好む水平槓桿的な姿勢に再

び戻るのである。多分彼の腮は鳥の指の如く、風が揺り動かすに連れて益々強く締めつける能力を有つて居るのかも知れない。

こんな不思議な姿勢で眠るのはジガバチばかりではない。ハツミバチ、オデイナー、ユースセル等幾他の虫が之れを模倣して居る。殊に雄がさうである。何れも腮で一本の莖を咬え、身體を伸ばし、肢を疊んで眠る。中に一番肥つた連中は御免を蒙つて腹を弓のやうに曲げて其の端を帆柱にもたせかける。



14 ジガバチ

斯うしてある種の膜翅類の寢室を訪づれてみても別にアンビニューズの問題の解決の鍵は得られない、たゞ同じ様に難かしい別の問題が飛び出すだけである。動物と云ふ機械の車仕掛に於て何が疲勞であり、何が休息であるかを解釋するに方り我々が猶ほ如何に明察を缺くかを告げられるだけである。ジガバチは腮の重學の逆説をもつて、アンビニューズは十ヶ月の懸垂になほ疲れを知らぬ其の天秤術の鈎をもつて生理學者を當惑させ、一體休息とは何かと思ひ怪しませる。事實は休息などと云ふものは生に終りを告げしめる休息の他には決してないのである。闘ひは熄む時がない。何時も何かの筋肉が働いて居り。何かの腱が引つ張つて居る。眠りは虚無の平靜への復歸と見えなければならない、不眠と同様一つの努力であつて或るものは肢を、卷尾の端を働かせ、またあるものは爪

を、腮を働かせて居るのである。

五月の半頃に變態が完全に済んで成虫となつたアンビニューズが現はれるが、形と云ひ服装と云ひ尼蠶螂に比して更に一段と人目をひく。幼虫時代の途方もないで立ちの中、あの尖つた僧帽、鋸状の籠手、長い胸、膝當、腹の下面にある三列の薄片等は其のまゝに保つて居るが、今はもう腹部は牧杖の頭のやうに渦巻く事なく、全體の態度が前よりも端正である。淺緑の大きな翅は肩のあたりが薔薇色で、雌雄何れに於ても飛び立つに迅く、腹の屋根をなして居る。腹は下面が白と緑の縦縞になつて居る。雄はお洒落で蠶蛾のやうな或る種の黄昏蝶の觸角に似た羽状の觸角を羽根飾のやうに頂いて居る。柄から云ふと、雄は殆ど雌に等しい。

構造上の極く小さい二三の點を除くと、アンビニューズは尼蠶螂そのまゝである。百姓たちは之れを間違えて居る。春、此の僧帽を冠つた虫に出會ふと、百姓たちは之れを秋生れのありふれた「神祈り虫」だと思ふ。形が同じやうなのは習性も同じであるしだと思はれるかも知れない。其の甲冑の奇怪さ故にアンビニューズの方が尼蠶螂よりも一層殘忍な生活様式を有するものと思ひたくなりさへもするかも知れない。私は最初さう思つて居た。して誰でも似て非な兩者の類似につい欺まされてさう思ふに違いない。之れは是非明かにしなければならぬ誤解である。アンビニューズは其の外見の武張つて居るにも似ず至つて穩かな虫で、育てて見ても殆ど育て損である。

鐘形籠の中に、或は六疋程一緒に集めて、或は一組づゝ別々に、容れて置いても、一寸の間でも其の平靜な態度を亂した事がない。幼虫同様至つて小食で日に一二疋の蠶で満足して居る。

大食家は騒がしい。パツタに腹がふくけると蠶螂は直きに腹を立てて拳闘の姿勢をとる。アンビニューズは粗末な軽い食事を取つて居て對敵示威運動と云ふものを知らない。決してお互の間に争ひがない。蠶螂がよくやるやうに俄然として翅を擴げて妖怪のやうな態度を取り、不意を食つた蛇のやうな息音を立てると云ふやうな事は決してない。なぐり合つて負けた方が食はれてしまふあの殘虐無道な大饗宴の下心などは決してない。かうした身の毛もよだつ醜怪な事實は彼等の全然知らない所である。

あの無殘な戀も亦彼等の知らざる所。雄は熱心にいろ／＼と持ち掛けて永い試練を経た上でなければ成功しない。幾日も幾日も煩くつき纏はれるので雌も遂には我を折るのである。婚禮の後も萬事は端然と行はれる。雄は羽根飾を振り立てつゝ、雌の敬意を受けながら引き揚げ、捕えられて食はれる少しの危険もなく己がこま／＼とした獵の仕事にいそしむのである。

雌雄はお互に無關心に平和に同棲して七月の半頃までになる。さうすると雄はもう老い勞れて、ぢ



アンビニューズ

つと考え込み、最早獵はやらす、足腰がふらつき、金網天井の天邊から次第に下つて遂に地上にぱつたりと落ちる。彼は大往生を遂げるのである。もう一つの雄、即ち尼蠶螂の雄の最後は、忘れてはいけない、大食な女房の胃袋の中である。

産卵は雄の死後間もなく行はれる。巢作りの間際になつてもアンビニューズは尼蠶螂のやうに多産の爲めに重くなつた大きい腹を抱えては居ない。相變らずすなりとして容易に飛び立つ事の出来るのは、子の數の多からぬ事を語つて居る。事實、稈莖や、小枝や、一とかけの小石にくつついて居る其の巢は一寸法師蠶螂たる灰色蠶螂の巢と同じ程の小さなもので長さは精々一センチメートルに過ぎない。全體の形は不等四邊形で其の一番小さい方の側の一つは僅に中高であり、他の一つは斜に突つ立つて居る。普通此の斜面の頂上に一つの糸狀の突つ起物が突つ立つて居るが、蠶螂及び灰色蠶螂の巢の末端の尖端に似て更に細いものである。これは粘液の最後の一滴が糸のやうに引き伸ばされたまゝ固まつたものである。建物が出来上ると石工たちはリボンをつんだ青葉の一枝を其の頂上に立てる。それと同様に蠶螂類は完成した巢の上に一本の帆柱を立てるのである。

乾いた泡で出来て居る、非常に薄い、灰色がかつた一種の野呂がアンビニューズの卵を蔽うて居る、殊に其の上面を蔽うて居る。此の直きに消えて失くなる薄い塗料の下に等質的な、角質の、そして薄茶色の基礎物質が見える。餘り目立たない六七個の溝が兩側面を輪切りにして居る。

孵化の後に見ると、巢の稜線上に約一ダースの圓い口が二列に互ひ違ひに開いて居る。之れは幼虫の出口である。其の縁は少しく突起し、一つの口から次の口へと續いて一枚のリボン状をなし、互ひ違ひのつるを二列に並べたやうに見える。此のリボンの左右振動が作業中の輸卵管の左右振動の結果である事は明かである。此の出口が形と云ひ配列の具合と云ひ如何にも整然として居り、加ふるに巢の側面の様子が様子として、可愛いニツのパン神の笛を並べたやうである。

此の口の二つ二つ一つの小房が在つて其處に二つの卵が突つ立つて居る。随つて産卵の總數は約二ダースである。

私は孵化の現状を見た事がない。幼虫が、尼蠶螂の幼虫のやうに、脱出を助成するに適した何か過渡的な状態に先き立たれて居るかどうか全然分らない。多分此處には何もそのやうな物はないのかも知れない。それ程萬事が脱出の爲めによく準備されて居る。小房の上方に何等の障害物もない極く短い一つの前庭が口をあけて居る。之れを塞ぐものはたゞ少量の泡様物質のみであるが、極めて脆いで生兒の腮で容易に破られるに違ひない。直接外界に通ずる此の廣い廊下を以てしては長い肢も、細い觸角も最早邪魔な附屬物ではなくなる。それで此の小虫は、初期幼虫の状態を経る事なく、卵の出口からしてすでに肢や觸角を結構自由にして居るのかも知れない。實際を見て居ないのだから、私は單に多分さうだらうと思はれる所を記すに止める。

此の比較習性に就いてもう一言。蟻螂には戦闘あり、同族相食あり、アンビユーズには平和な性質あり、同族相尊あり、體組織を同じうして、何處からこれ程甚だしい習性上の相違が起つて来たか。多分食物の關係であらう。粗食が事實上性質を和らげる事は禽獸も人間も變りがない。美食は性質を愚鈍ならしめる。肉類と、獸的憤怒の酵母たるアルコールとに飽食する大食漢は到底其の麵麩を少量の牛乳に浸す所の粗食者の如き温順さを有ち得る筈がない。蟻螂は此の大食漢であり、アンビユーズは此の粗食家である。それに定まつた。

しかし殆ど同様の體組織はまた同様の慾望を生ぜしめるに違いないと思はれるのに、一方は貪食症となり、他方は小食となるとはどう云ふわけであらうか。蟻螂類は既に幾多の他のものが我々に告げた所の事を、彼等の方法で我々に繰り返えし告げて居るのである。即ち、すべての傾向、すべての能力は解剖學に絶対に從屬するわけではない。物質を支配する所の物理的法則の遙か上方に本能を支配する所の他の法則が翱翔して居るのである。

固有名詞略解

アシル (Achille) **トロイ** (Troy) を攻めた希臘軍の最大勇者。彼生まるゝや彼の母彼の踵をつかんで彼をスチックス河の水に浸した。そこで彼は踵以外の如何なる點に於ても傷つけられる事がない。加ふるに、獅子と虎との鬪味で育てられて無類の勇猛。惜しいかな敵將パリスの投げた毒矢を踵に受けて落命した。

アジャクス (Ajax) 希臘軍の勇士。アシルの死後アシルの遺した武器をユリスと争ひ、希臘人が之れをユリスに與ふるや憤激の餘り自刃する。彼の流した血から咲き出たのがヒヤシンスだと云ふ。

アナクレオン (Anacreon)

希臘抒情詩人。戀と酒と歡樂とを歌つて一家の風をなす(紀元前五六〇—四七八)。

アリストット (Aristotele)

希臘の碩學。哲學、科學の祖。アレクサンドル大王の師にして友。(紀元前三八四—三二二)

アメントス (Amyntas)

マケドニア數代の王の名。第一世は紀元前五〇七年に即位。

ボーンヌ (Baucis)

本文註をみよ。

ベドウエン (Bedouins)

北阿弗利加及亞刺比の沙漠に流浪しつゝ、追刺によつて生活して居る亞刺比亞人。

ベランジエ (Béranger, Pierre Jean de)

佛蘭西著名の小唄作者。其の小唄は屢々純然たる抒情詩。彼民衆の

友として奮起し、自由の爲めに歌ふ時、王座も搖いだ。七月革命に彼程寄與したものは他にないと云はれる。(一七八〇—一八五七)。

カロ (Callot, Jacques) 佛蘭西ナンシー生まれの版畫家、畫家。着想の怪奇豪放他の追隨を許さず。デッサンの嚴格、版刻の精細を以て知らる。(一五九二—一六三五)。

コリドン (Corydon) 牧人の名。

ディオスコリド (Dioscoride) 紀元第一世紀の希臘の醫者。シシリヤに生まれ、アントアームとクレオパートルの侍醫となる。

エソプ (Esopé) 奴隸出身と稱せられる希臘の寓話作者、今日エソプ物語集と稱するものは僞プラニユド (Pianude) の手になるものと云ふ(紀元前六世紀)。

フランクリン (Franklin) 米國ボストンに生まる。避雷針の發明で知られて居る(一七〇六—一七八七)。

ガルガントウマ (Gargantua) ラブレー二大傑作の一。

グランヴィール (Grandville, Jean-Ignace Isidore) 佛蘭西著名の線畫家。ナンシーに生まる(一八〇三—一八四七)。

ヘルメス (埃及の)。古代埃及の神トート (Thot) を埃及人は希臘のヘルメス (羅馬のメルキュール) と同一神と見做し之れを大神 (Uriméris) と崇め仕えた。

イリアド (Iliade) オメール (Homère) の傑作と稱する英雄詩。希臘軍とトロア軍との戦を語る。

イジス (Isis) 古代埃及の女神。醫術、婚姻、小麥栽培等を司り、初代埃及文明を擬人せるものと云ふ。

ジャコト (Jacotot, Jean-Joseph) 佛蘭西の言語學者にして教育家。智能の解放を目的として綜合教育法 (La-

méthode d'enseignement universel) を創始す。同法は又ジャコト式教育法とも呼ばれる(一七〇一—一八〇〇)。

カアバ (Kaaba) メッカの回教寺院内にある小角堂。回教徒は何處にあるも此の方向を差して祈る。

ラフォンテーヌ (La Fontaine) 形式技巧の末に趨り、徒に粉飾を事として、自然を見る事を知らなかつた佛蘭西文學界に田園の風物禽獸を自由無礙な詩形に歌ひ出して一脈清新の氣を導入し、路易十四世の太古典時代の出現に寄與する所少なくなかつた大詩人(一六二一—一六九五)。

ラトレイネ (Latreille, Pierre-André) 幼くして両親に捨てられ、他人の手に育てられ、長じて僧となる。後、職を辭して昆蟲の研究に身を捧ぐ。一七九六年 *Précis des caractères généraux des insectes disposés dans un ordre naturel* 著して昆蟲學の基礎を定む。

リキユルク (Lycurgue) スパルタの立法者。個人を國家に完全に隷屬せしむ(紀元前九世紀)。

マントイオル (Mathiote, Pierre-André) 伊太利の醫者にして博物學者。前人未知の多くの動物、植物、礦物に就て記述して居る(一五〇〇—一五七七)。

メック (Maqne) アラビアの最大都會。マホメット此處に生まる。回教徒の巡禮地。

メリス (Melibée) ヴイルジルの詩に歌はれた牧人の一人。

モイズ (Moïse) 舊約聖書中最大人物。ユダヤの立法者、豫言者。ユダヤの民を率ゐて紅海を渡り埃及を脱出す。シナイ山上に神の姿を拜し掟を受け十誡を認む。

モプシユス (Moprus) 希臘の神託者、神占者の名。

ミユルサン (Mulsant, Martial-Etienne) 佛蘭西の博物學者、里昂に死す(一七九七—一八八〇)。

ニル (le Nil) 東阿弗利加の大河。ニユービー及び埃及を貫流し、汎濫によつてこれ等の地を肥沃ならしめる。

ニユービー (Nubie) 埃及の南方、エチオピアとの間に介在する地方。

オリヴィエ (Olivier, Guillaume-Anoine) 佛蘭西の昆虫學者(一七五六—一八一四)。

オジリス (Osiris) 古代埃及の神々の一。死者の守護神。イジスの兄にして又夫。

ファイルモン (Philemon) ポーシスの夫、本文註を見よ。

フォセ (Phocee) 小亞細亞なるイオニアの十二大市中に數えられた希臘の市。市民はアドリアチックより中部

伊太利西班牙にまで發展して佛蘭西の前身ゴールの地に Massilia 即ち今日のマルセイユを建設した。

プリヌ (Pline Caius Pinius Secundus) 大プリニウス或は博物學者プリニウスと稱せらる。古代のあらゆる

科學を網羅せる博物史三十七卷を残して紀元七九年ヴェスヴィアス第一回の噴火に燒死す。餘りに側近く之を觀察しようとした爲めである。ローマの武人にして學者(二三—七九)。

ラブレール (Rabelais) 十五世紀に於ける佛蘭西の醫者、後にムードンの司祭。貴族、僧侶をはじめ時代の諸制度を完膚なきまでに攻撃し、人間性の自由發揮を力説せる痛烈なる諷刺物語 Gargantua 及び Pantagruel によて知らる。

ラムセス (Ramsès) 埃及第十九王朝の王の名。

トウトモシム (Thoutmois Thoutmès) 埃及第十八王朝四王の名。

ティティール (Tityre) ヴイルジルの時に歌はれた二牧人の一人。

レオシニール (Réaumur, René Antoine Ferchault de) 佛蘭西の物理學者、物理學者。博物學の方面に於ては烈氏寒暖計に其の名を永く留め、博物學の方面に於ては殊に昆虫に於て他の追隨を許さない研究のある事はフアブルの云ふが如くである(一六八三—一七五七)。

ラムフォード (Rumford, Benjamin Thompson) 米國生まれの博愛主義的物理學者。經濟スーブ、ラムフォード式經濟暖爐等の發明がある(一七五三—一八一四)。

タルタラン・ド・タラスコン (Tartarin de Tarascon) 佛蘭西文豪アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet) が法螺吹きながら腹に何等の悪氣もない南佛人の性格氣質を諷した荒唐にして輕妙な物語の表題にしてまた其の主人公の名。

ヴイルジル (Virgile) 拉丁最大の詩人と稱せられる。Bucoliques, Georgiques, Enéide 其の他に織細、優美、敏感、高尚等の特性を快き諧調もて歌ひ出す(紀元前七〇—一九)。

昭和五年四月五日印刷
昭和五年四月十日發行

(定價金壹圓)

帯丁通丁は何時でも取替へます

—(5) 昆 虫 記—

譯者 鷺尾 猛

發行者 足助 素一

東京市麴町區四番町九番地

發行所 叢文閣

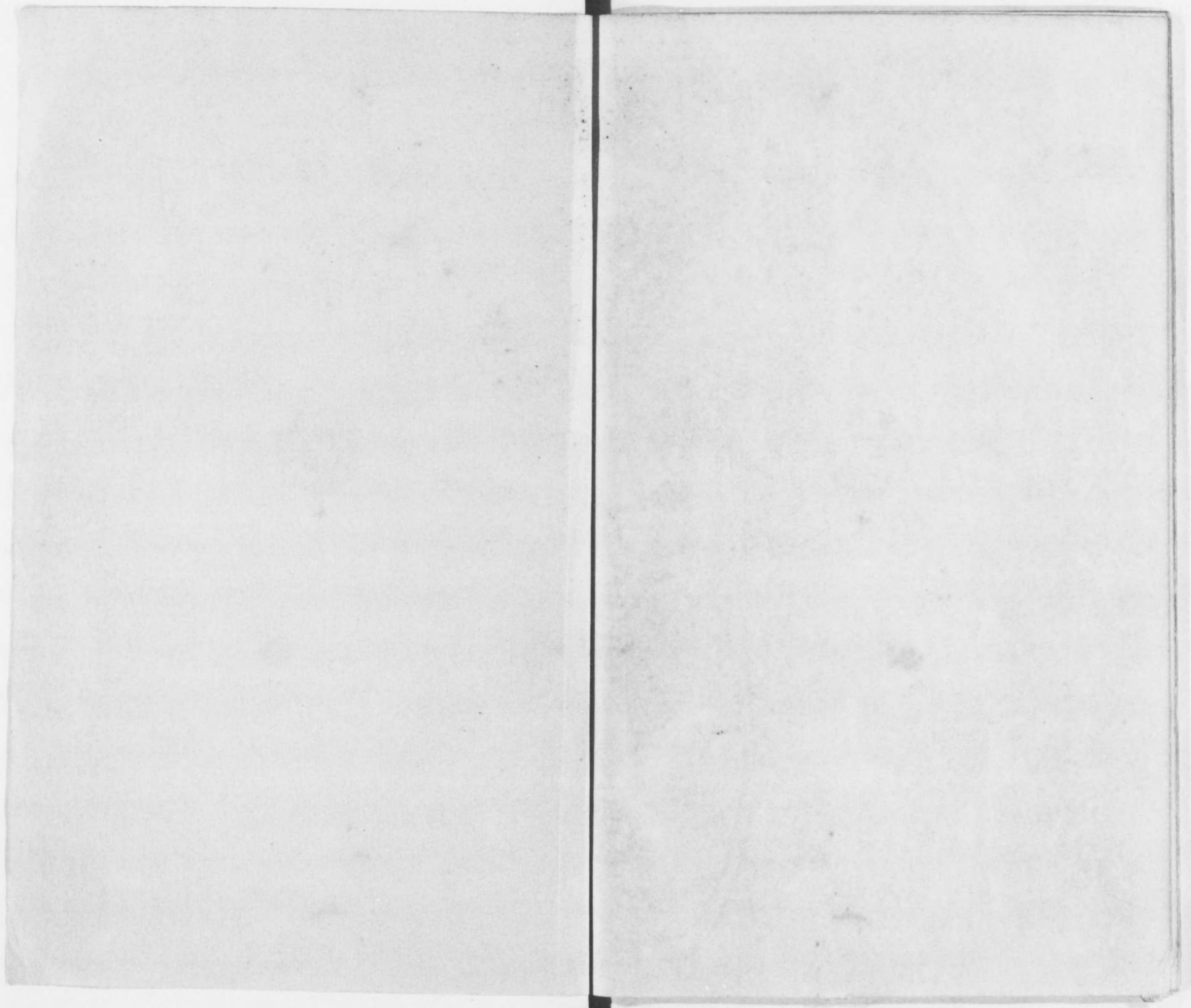
振替東京四二八八九番
電話九段二五六八番

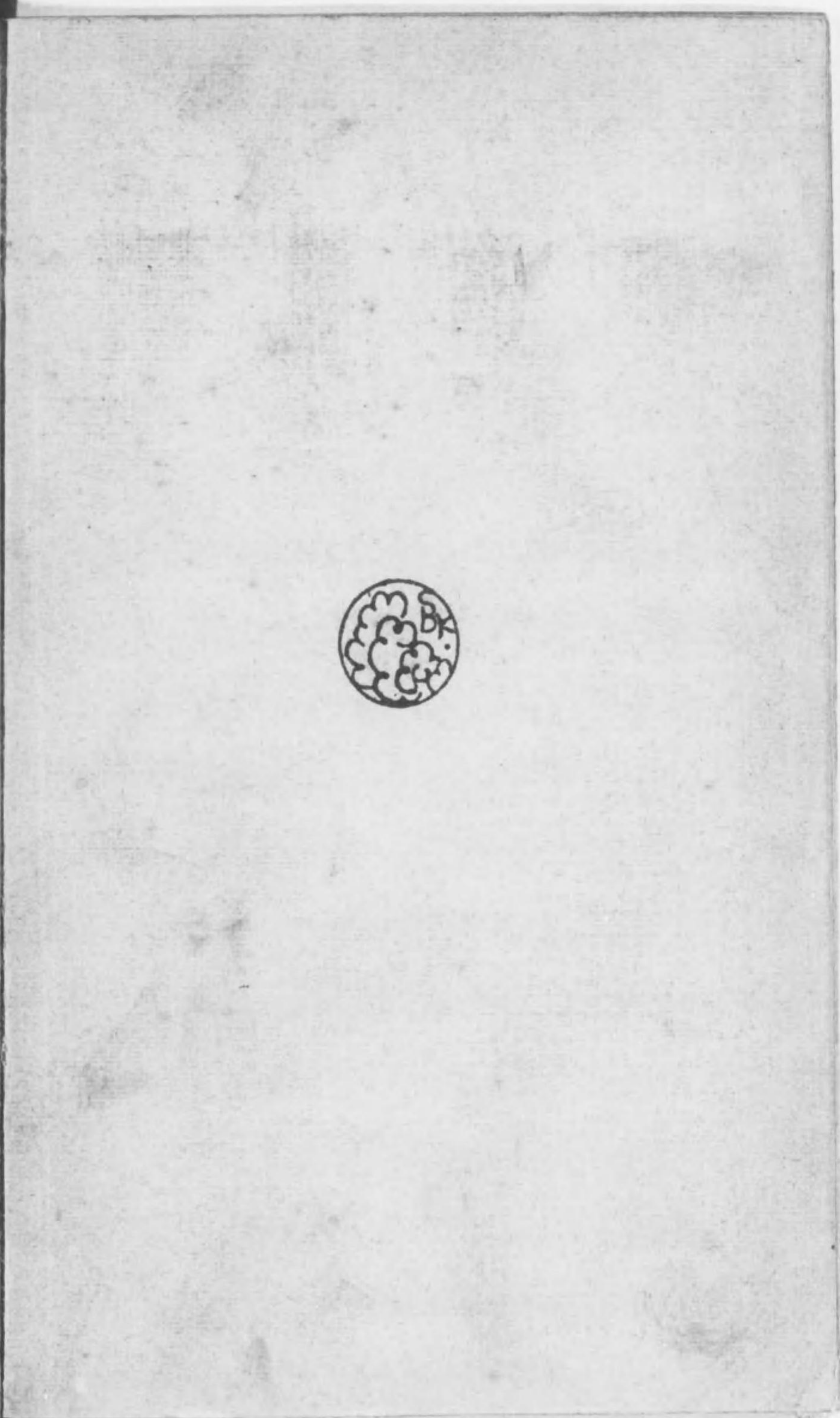
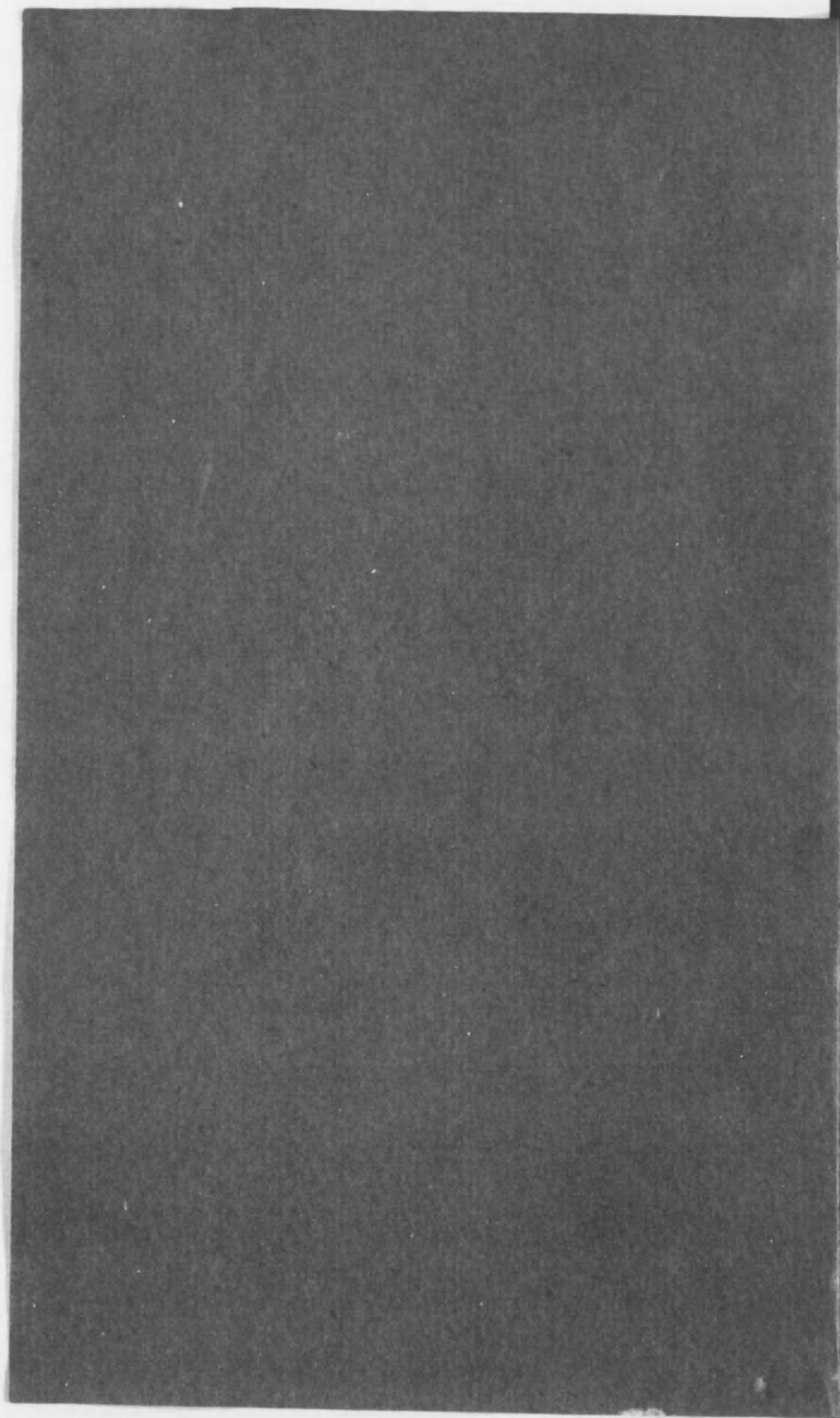
東京市神田區表神保町十番地

印刷所 文成社印刷所

前田宗松







385
207

終